

海潮温泉

也、即有正倉

〔懷橘談下 大原郡〕海潮

海潮とは古老傳曰、宇能活比古命、祖次義禰命を恨て、北の方出雲の海潮を押止て、御祖の神を漂す、此に海の潮至るゆへに得鹽と云、神龜三年に、宇を海潮と改む、即東北須賀小川の湯淵村中川の温湯あり、同川上も間林川中に温水出、得鹽の社ありと記せり、今も海潮の湯ありて、瘡疥痲痺カサケユカリの類を患る人行て沐ぬ、

島根温泉

〔夫木和歌抄二十六 温泉未國〕まねのみゆ

神祇伯顯仲卿

よと、もにまたにたぐひはなけれども、まねのみゆはさむるよもなし

石見國  
温泉津温泉

〔温泉津日記上〕文化十とせ癸酉といふとし、二月二十二日、石見國温泉津におもむく、さるはおのれ、考この六とせばかりさき、脚疾を憂てあしなへ、ふむことあたはざりしを、幸に醫藥効あり

て、ひととせばかりをへて本腹せしが、去年の冬又再發して歩行むつかしく、官途こゝろにまかせねば、かの温泉に入治すべく、此春君に願奉り、往來五十日の御暇たまはり、さて思ひたちけるなりけり、略中 廿六日、午前温泉津に著、宿甲屋又左衛門奥なる一間をかりきりのすみどころ

と定む、温泉は前なる山手の湯屋新左衛門といふ者の家のうちにありて、鍵温泉、おとしゆ、入ごみとわかつ、おのれは鍵湯に浴す、かぎ湯といふは、ゆの門に錠をさして、入浴の度々、鍵をもち行錠を明て入事なり、おとしゆもそのこゝろなり、略中 廿七日、けふより浴度先日、に四度と定む、

すべて浴度のおほきは、いむ事にて、強人五六度、弱人二三度に過べからずといふ、掟書あり、されどはじめは、度數すくなく、追々に増はよしといふ、略中

此家のあるじ又左衛門話に、此温泉の濫觴、いつの事に侍るか、一疋の兔來り、足をいためるやうすなるが、三七日が間、此温泉に浴し、平愈せし趣にて、飛去けるを、わが先祖見つけて、はじめて試